

タイトル

## 「サヨナラするのはつらいけど」

### 演出ノート

#### ○あらすじ

聡子の親友、詩織が死んでしまう。病院で詩織の遺体と対面してあまりの事に涙も出ず自分の家に帰ってきた聡子が呆然としていると、突然詩織の幽霊が目の前に現れます。あまりにもはっきりとした姿なので、混乱した聡子は動画に詩織を映してみようとしたら、詩織の姿が全く画像には映らない。というところからが物語の始まりです。

隣にはっきりといるはずなのに詩織が映らない、さっき遺体も見て確実に死んだはずの詩織が隣にいる。混乱しながらも聡子は現実を受け止めようとします。そして最後徐々に姿が薄くなる詩織を聡子は抱きしめます。詩織がいなくなった部屋で詩織からもらった花の隣で聡子はやっと涙を流す。という物語です。

#### ○スマホカメラ

最初は手持ちで始まります。置いているスマホを手にとって自撮りを始める感じのスタート。

その後テーブルの上にセットする感じです。

その時、画角の中は、谷さんの隣に一人分の空間が常にある状態です。そこに詩織が座っている設定で。

その時、その一人分の空間の奥に花を置いてください。

#### ○詩織の存在

まあ、ずっと詩織という親友のお化けとの会話になります。難しいと思います。さわれる設定なんでさわるんですが、まあ、さすったりなでたりなんであんまり完璧なマイムって感じではなくざっくりで良いです。詩織の喋ってるだろう間もあまりシビアに気にせず、

親友と喋っている砕けた感じのスピード感になればと思います。

どうしても、え、とか、あ、が多いですが、一言一句忠実に読まなくても大丈夫です

○全体の空気感

基本的にコメディと思ってください。全体的に軽いトーンで。聡子も喋っているとすぐ詩織が死んでる事を忘れてる感じで。

最後のシーンの膝に顔をうずめるシーンも泣いてるのか泣いてないのか分からない程度で大丈夫です。

なんか好き勝手言いましたが、すごくやりにくい脚本になってしまいました。

とりあえずこれで進めてもらえればと思います。で、出来た動画を送ってもらって、また微調整していく感じですかね。

スマホの画面が、グラグラと混乱している。

聡子の声「え、ちょっと待って動画録るから」  
画面が安定すると聡子が映る。自撮りしているような画角。聡子の隣に一人分の空間。

聡子「え、待って待って。やば」  
聡子、自分の隣を見る。  
スマホの画面を見る。

聡子「全然映ってないじゃん」  
隣を見る。

聡子「え、やっぱりね。ぐらいな感じなの？映ってないんだよ詩織。・・・いやまあそうなんだけど」  
聡子、自分の隣とスマホを交互に見る。

聡子「え、いやいやいや、ほんとに？。いやいやいや。ちょっと落ち着こう私。うん一旦、」  
聡子、テーブルの上にスマホを立てる。  
深呼吸する聡子。  
そして改めてスマホの画面を見る。  
聡子の隣に一人分の空間。

聡子「全くじゃん」  
スマホの画面と隣を何度も見る。  
スマホの画面を見ながら隣の何もない空間を激しくさわる。

聡子「こんなさわれるのに？え、ちょっと待って。ほんとパニック。え、ほんとに詩織だよな？やっぱ生きてんの？  
え、いやまあ、確かにさっき病院で見たけど。・・・え、ちょっと情報量が多すぎて頭がついていかない。  
いや、別に詩織が謝ることじゃないけどさ」

間

聡子「え、こういう事聞いていいのか分かんないけど・・・

お化けて事なの？・・・うん。・・・だよ。えー私そういうの见えない体質だと思って生きてきたんだけど」

じっと画面を見て隣を見る聡子。

隣を見る聡子。

聡子「いや悲しいよ当たり前でしょ。でも電話もらってからずっと心止まってんだもん。え、電話？詩織のお父さんから。そうだよ。で、あわてて病院行って。でも詩織、うちに泊まりに来て寝てる時と全く一緒の顔してんだもん。全然ピンと来ないよ。おととい一緒にご飯食べたばかりだし。いや、ごめん別に責めてるつもりじゃ。でも全然受け止められないし、全然涙もでない。え？」

聡子、置いてある花を見る。

聡子「当たり前でしょ。ちゃんと飾ってるよ。え、何、もしかして。・・・いや、この花プレゼントしてくれた時、もうなんか思ってたの？・・・え、だって毎年私の誕生日、詩織ふざけたものしかくれなかったじゃん。気味悪いパンダのぬいぐるみとか、気味悪い光るどくろとか。気味悪い・・・いや、別に嫌だったわけじゃないけど。ただ今回は急にこんなちゃんとしたお花だったから・・・そうだよ。え、・・・何？・・・このお花の？」

聡子、花を見つめる。

聡子「そうなんだ」

そして隣を見る。

聡子「・・・これってあれかな？ 他人が見たら私一人で喋ってるみたい。・・・だよ。ゴーストみたいな感じだよ。ゴースト、映画の。え、詩織見たことないの？マジで？あのあれ霊能者役があの人の、ほら、コミカルなおばさん。えっとほら。ウーパールーパーみたいな名前。あ、この前やってた天使にラブソングをの。そう、ウーピーゴールドバーグ。ああ、すっきりした。ウーパールーパーぽいでしょ。録画してまだ見てないんだよな。ああ、詩織、声優が違ってたよな。

この吹替はこの人ってイメージって大きいもんね。もうだって私子供の時ジャッキーチェンが日本語で喋らないって知った時ショックだったもん。えーあの声じゃない上に日本語でもないって、衝撃だったなー」

間

聡子「ってこんな事話してる場合じゃない？何、こう見えてる感じはどれぐらい続くの？ ずっとこう見えてるの？それとも期間限定的な？・・・  
そうだよ分かんないよね。

でも私の所よりも、お父さんとお母さんのところに行ってあげた方がいいんじゃない？うん・・・お母さんもう放心状態だったよ。・・・

大丈夫だよ、私が見えてんだから家族も見えるよ」

聡子、隣を優しくなでながらじっと見る。

聡子「ねえ、・・・ほんとに死んだの？・・・いや、まだ全然現実感無くて。だって今詩織、こうやってここにいるし。あれ？・・・ううん何でもない。・・・え、自覚あるんだ。

うん、なんかちょっと薄くなってる。え、このまま消えてく感じ？」

聡子、スマホの画面を見る。

聡子「え、映んないかー、残しときたいのに。心霊動画なんてインチキなんじゃん」

聡子、隣を見る。

聡子「え、どんどん薄くなってるよ」

聡子、両手で必死に隣をさすってみる。

聡子「え、なんかこうやったら濃くなりそうな気しない？  
そうだけどさ。消えないでよ。えー、ほんと向こう透けてきちゃってるじゃん。怖いー。いや詩織が怖いとかじゃなくてだよ」

聡子、必死にさすり続けてる。

聡子「そんな事言うなよ。うん。こっちのほうがありがたいだよ。うん。私も楽しかった。え、やだ、やだ、やだ、ちょっと待って。え、うん、ちゃんとお葬式行くけどさ。あ、え、いや何でもない。え、・・・いや喪服

実家だったて思いだして。やだやだやだ消えないでよ、  
詩織、待って待って詩織。行っちゃダメだって」

聡子、詩織を抱きしめる。

腕の中に詩織を感じてる聡子。

間

聡子「ジーンズで行けるわけないじゃん」

聡子の両手がすっぽ抜ける。

呆然と詩織がいただろう場所を見ている。

間

花の隣に体育座りする聡子。

顔を膝にうずめる。

少し肩を震わす聡子。

寄り添うよに咲くデンファレ。

了